

愛してると言いなさい  
3

### ◀ ルシター・スニ

リゼの旧友で、同じくダスタ・フォーン国建国に関わった大魔法使い。大陸の危機を救った英雄で、既に亡くなっているはずだったが……

### ▲ ジークウィーン ▲

ダスタ・フォーン国の王子。交際指南役である紅緒に片思い中。

### ▲ ジーチェ

紅緒の専任侍女。控えめ・慎重・冷静・謙虚で、侍女の鏡。

### ▲ ダナン

国王アワードの側近。ジーチェの元恋人。

### ▲ カトレー

ジークウィーンの側近。アルディに想いを寄せる。

### ▲ ラヴェル ▲

リゼの第4弟子。アルディにべた惚れ。

### ▲ アルディ ▲

王妃付きの侍女を務める貴族の令嬢。ようやく自分の恋心を自覚した。

### ▶ リゼ ▶

ダスタ・フォーン国建国にも関わった大魔法使い。年齢不詳。ベニオが大好き。

### ▲ チビクロ

ベニオの愛猫。実は「最強の契約の猫」。

### ▲ 相良紅緒

リゼの助手兼ジークウィーンの交際指南役。普段は普通のOLとして働いている。とうとうリゼと恋人同士に!

登場人物  
紹介

## 目次

第一章	闇の中へ	7
第二章	惑乱の魔法使い	62
第三章	決別	152
第四章	嵐の中の求婚	234
最終章	愛してると言いなさい	272
エピソード		297

〈正しい結婚をするための七つの課題〉

- 一、挨拶をしましょう（笑顔を大事に）
- 二、眼を見て会話をしましょう（感じよく）
- 三、お茶を飲みましょう（振る舞いは適切に）
- 四、デートをしましょう（手を繋いで）
- 五、ダンスに誘いましょう（キスは優しく）
- 六、口説いてみましょう（告白は真剣に）
- 七、求婚をしましょう（心を込めて！）

第一章 闇の中へ

一

一睡もできなかつた。

じりじりと夜が明けて、カーテンの隙間から朝の光が射し込み、床に蹲<sup>つ</sup>たままのアルデイを照らした。

昨夜、宮廷魔法使いリゼの弟子であるラヴェルが、傷だらけのまま消えた直後、アルデイは衝動的に王宮地下の研究室に向かおうとした。泣きながら駆け出そうとしたアルデイを腕<sup>うで</sup>ずくで止めたのは、ダスタ・フォン国第一王位継承者ジークウィーン王子の側近、カトレーだった。

「待ちなさい。深夜にそんなに取り乱した状態で王宮を走り回るつもりかい？ 栄<sup>は</sup>えある王妃付き侍女のすることとは思えないね」

「でも、ラヴェル様にもしものがあつたら困りますの！」

「いいから少し落ち着きなさい。今宵<sup>こよひ</sup>はただでさえいつもよりひとが多い。そう騒<sup>さわ</sup>ぎ立ててはいけないよ。ここには鵜<sup>う</sup>の目鷹<sup>やぶ</sup>の目でひとの足を引っ張ろうとする輩<sup>やから</sup>がいるのだから、隙を見せるのは

よくない。君にも、デューイ家の名にも傷がつくだろう」

真剣な表情でたしなめるカトレーの声が、ひどく遠くで響いている。

冷静沈着なカトレーらしく、言っていることは理にかなったものなのだろうが、いまはそんなこととはどうでもよかった。

「行かせてくださいですの。行かせてくださいですの！」

「わかった、じゃあ俺が行く」

そう言ったのは、アルデイの婚約者イザックだった。

イザックはアルデイの主張を呑む形で、会話を取り持つように続けた。

「さっきの男が誰だか知らんが、とにかく様子を見てくれればいいんだろう？ 必要なら手を貸して来る。あとで知らせに寄るから、おまえはおとなしく部屋で待っている」

「いや、ここは私が行こう。この中で一番王宮事情に明るいからね。イザック殿はアルデイ殿が先走った行動に出ないように、ここで見張り番をしてくれないか」

耳を搔いて「わかった」とイザックが頷く。

アルデイは反論の余地もなく部屋に放り込まれ、仕方なくカトレーの知らせを待った。胃が焼けつくような思いで部屋を右往左往し、泣いたり、ラヴェルを罵ったり、最悪の事態を想像して怯えたりした。どうしても様子を見に行きたくて、何度か部屋を出ようと試みたものの、いくら押しても扉は開かなかつた。そうして、ぼうつとしたまま夜が更けていった。

朝になった。

アルデイはのろのと立ち上がろうとしてふらついた。頭が重い。身体も重い。泣きすぎて瞼が腫れている。心配し過ぎて心は麻痺してしまったようだ。

なぜこんなに気になるのだろう、と混濁する意識でぼんやり考える。

たぶん、ラヴェルという男がよくわからないからだ。

傍にいれば暑苦しいくらい主義主張して、べたべたくつきたがり、歯の浮くようなセリフを並べたてるくせに、それを覆すようなとぼけた態度をとる。あまり自分のことを喋りたがらない。訊けば答えてくれるが、そこに感情はほとんど含まれず、ただ淡々と事実を語る。

——恋をすると、眼が穢れるんです。

ふと甦ったラヴェルの声に動揺する。無邪気な笑顔が眼の裏にちらついた。心臓を錐で揉まれるような痛みを覚えて、胸を押さえる。ラヴェルは全身血まみれだった。あのまま放置してはいくら強い魔法使いといえど出血多量で死ぬだろう。

ぞつとした。

もう待ってられないと部屋を飛び出そうとして、通りがかつた鏡台に映った自分を見てぎょっとした。スイーラに黒い血の染みが広がっている。加えて、自分の顔色の悪さといったらまるで亡霊のようだった。

アルデイは急ぐ心を抑えてクリーム色のサラエンに着替えた。身ぎれいにすることも王妃付き侍女の嗜みだ。化粧で眼の下の隈と顔色をごまかし、髪ほつれを撫でつけ、外出用の半仮面をつけ

た。これではつと見には腫れた顔を隠せる。

「サクちゃん、いますの？」

扉の外に声をかけると、ぶつきらぼうな声が応じた。

「ああ」

「退いてくださいですの。もう朝ですの」

扉からひとが離れる気配がした。ノブを捻ると、ようやく開く。

「カトレー様から連絡はまだないですの？」

「あった。だが、どうも苦戦しているらしい。危険だから、落ち着くまでおまえを連れて来るなど言われたが……どうする、行ってみるか？」

「はいですの」

アルデイの返事に、感情に左右されることの少ないイザックが短く縦に首を振る。

王宮に不案内なイザックを先導する形でアルデイは先を急いだ。途中、侍女仲間のひとりに声をかけ、仕事に遅れる旨を伝える。王妃様にはあとで直接お詫びと報告をしよう。

朝の忙しい空気を振り切るように地下へと続く階段を早足で降りている途中、イザックが不意に言った。

「惚れているのか」

びっくりして躓いた。ぐらりと前に傾ぐが、すかさず身体を支えられる。

「気をつけろ」

「サクちゃんが変なこと言うからですのっ」

更にむきになってアルデイは「違いますの」と否定した。

「あ、あんなよくわからないひと、好きじゃないですの。でも……色々お世話になっていきますし、すぐくひどい怪我をしていたから心配なだけですの」

「そうか」

イザックに手を握られて先導される。アルデイはイザックを横目で窺った。無愛想な顔つきはいつものことだが、ほんの少しだけ眼元が険しい気がする。

「……迷惑かけてごめんなさいですの」

「違う。おまえが関わることで迷惑と思うことはなにもない。ただ……」

珍しく口を濁す。少し逡巡したあと続けた。

「ただ俺は、おまえがあんなに声を上げて泣いて取り乱すところは子供のとき見たきりだったから、相手はよほど親しい奴なんだな、と思つて……少し悔しかっただけだ」

「サクちゃんが怪我しても同じように心配しますの」

「同じ、か」

寂しそうに呟かれて、アルデイは思わずうろたえてしまった。一步先を行く逞しい背は「十六年も婚約していて、その程度か」という落胆を隠さない。

二人の間の空気は気まずく重いものになった。

アルデイはいたたまれなくなつてイザックの手から指を外すと、俯いて呟いた。

「……アルは、サクちゃんに『妹』みたいに見られていると思っていましたの」  
「逆だろう。おまえが俺を『兄』のように見ていただけだ」

思ってもみない指摘にアルディは眼を瞠みはった。互いの認識が食い違っていたようだ。  
イザックにまっすぐに見つめられ、告げられる。

「少なくとも俺は、一度だっておまえを『妹』扱あつかいた覚えはない」

茫然ぼうぜんとして佇たなずむアルディを、イザックが片腕で楽々と抱き上げて階段を降りる。そのまま最下層に着くと前方のただならぬ騒動そうどうに眉をひそめ、顎をしゃくって言った。

「あそこか？」

リゼの研究室の前は多くのひとがひしめきあい騒然そうぜんとしていた。不審に思ったのはそこにいる大半が魔法使いのようで、長い杖を手にしていることだった。それも金と銀の杖を持つ者——即ち魔法研究所所属の選り抜きえぬの魔法使いたちだ。驚いたことに、中心にいるカトレーも赤銅あかどうの杖を腕に抱えている。

皆、難しい顔で額を突き合わせ、身振り手振りを交えながら意見を出し合っていた。

アルディが身動きみじごするとイザックは黙って彼女を下ろす。

二人に気づいたカトレーは険悪な表情になり、話し合いの輪より外れてこちらに來た。

「なぜここに。危険だから来るなど言っただはすだが」

カトレーはイザックを睨にらむ。

けれど、イザックはまったく応えていない様子で平然と言う。

「俺が連れて来なくとも、そのうちアルは勝手に来るだろうからな」

カトレーはアルディに向かい、語調を強くして言った。

「ここは危ない。安全を確保したら呼びに行く。それまで部屋で待っていないさ」

「いやですの。アルひとりだけ安全なところでじっとしているなんて。危険ってなんですか？ どうして魔法使いがあんなにたくさん集まっているんですの？」

アルディが訝なやむと、カトレーは疲弊ひんぱいしきつた顔で嘆息した。右足に重心を預け、くたりと立ちながら、無造作に髪を掻き上げる。そのしぐさからも苛立ちが伝わってきた。

「扉が開かない。中からなんの応答もない。無理矢理こじ開けようとしてもだめなので、仕方なく解除魔法を色々試している真つ最中だよ。及ばずながら私も協力している」

「カトレー様、魔法使い資格をお持ちでしたの？」

「免許はあるが、実践は乏とほしくてね。ほとんど役立たずさ」

口惜しそうに赤銅の杖を床にドン、とひと突きする。疲労の色が濃く、一晚でだいぶやつれたように見えた。昨日からかかりきりで力を尽くしてくれたのだろう。

自分がお願ねがいしたこともあり、アルディは申し訳ない気持ちでいっぱいになった。同時にこれほど皆に心配をかけておきながら、なおも引き籠り続けるラヴェルに対してふつふつと怒りが込み上げてきた。イザックやカトレーの制止を振り切り、魔法使いたちも押し退けて研究室の扉の前に立つ。「ここを開けてくださいですの！ アルですの！ 皆心配していますの！ いますぐ扉を開けるんですの！ 開けないと嫌になりますのっ」

アルデイの脅しの威力は抜群だった。なにかの力が働いて、あれほど堅牢にひとの侵入を拒んでいた研究室の扉がこつりと開いたのだ。

魔法使いたちが息を呑んで見守る中、アルデイは扉の隙間に身を滑り込ませた。

ここに入るのははじめてだった。魔法使いの研究室らしく書棚に入りきらず積まれた蔵書の山、実験道具や計測機類などがいたるところに散乱している。

そして奥に汚れものが山積みされている小さな洗い場があり、更にその向こうのベッド手前の床になにか黒いものが広がっていた。よく見てみると、うつ伏せの状態でラヴェルが倒れている。

「ラヴェル様！ ラヴェル様っ。——誰か、手を貸してくださいですの！」

「入りたくても入れない！ 君が扉を開けてくれ！」

カトレーが苛立った声で返してきた。おそらく、内側からひとを呼びこまないと入れない魔法でもかけてあるのだろう。アルデイは扉まで飛んで行って、カトレーとイザックの手を掴み、引つ張り込んだ。

「ベッドに寝かせて服を脱がせてくださいですの。アルはお医者様を呼んできますの！」

それから小一時間、アルデイは奮闘した。医者を呼び診察してもらい、看病にあたった。カトレーとイザックも着替えや手当てに尽力してくれた。さいわい傷口の多くは塞がり血は止まっていたが出血の量が夥しく、少しも予断を許さない状況だった。

ラヴェルはまったく眼を醒まさないまま昏々と眠り続けた。カトレーとイザックは「また様子を見に来る」と言っつて一旦職務に戻る。

アルデイは水で濡らした布で、びつしりと玉の汗が浮かぶラヴェルの額を拭いた。口元に水を運ぶとラヴェルは無意識のうちにこくり、こくりと二口飲む。それからアルデイは、こびりついた床の血を擦り取り、洗い場を片つけた。

それから何時間も過ぎた。

アルデイはつきつきりでラヴェルの傍にいた。そうすることでは彼の命を繋ぎとめることができないうような気がしていた。冷たい手を握る。力の抜けたその手は男性の手とは思えないくらい指が長く、繊細で滑らかで頼りない。呼吸は浅く静かで脈は子猫のそれよりも弱々しかった。カトレーが言うには「魔法力が恐ろしく低下している」らしい。生気のない顔。疲労が蓄積された顔。片眼鏡のない顔。じつとただ横たわるだけの身体。

その姿を眺め続けていると、また不安が膨らんできた。このままもう眼を醒まさないかもしれない。呑気な笑顔を見ることが、あの減らず口や軽い口説き文句を聞くことも、二度とないのかもしれないと繰り返し考えた。同時に、結んだ手の温かさを感じるたび、もうすぐ眼を醒まし、なにごともしなかつたように笑うだろうと希望を持った。

アルデイは祈った。祈って祈って祈って、祈り続けた。

ようやくラヴェルが意識を回復したのは、午後遅くなつてからだだった。

前触れもなくぱちりと眼を開き、きょんととしてベッドの傍にいるアルデイを見つめて言った。

「……あれ？ どうしてあなたがここに。なにかありましたか？」



間が抜けているにもほどがあるお気楽な言葉に、アルデイは呆れた。死ぬほど心配したというのに、当の本人はそれを知らずけろりとしている。無性に腹が立ったものの、元気な顔をまた見られたことがただ嬉しくて、ほろほろと涙がこぼれてしまった。

「うわっ、な、なんで泣くんですか。なにかあったんですか、なにがあったんですか？」

「……死んじゃうかと思いましたの。ものすごくものすごく心配しましたの」

「死ぬ？ 誰が？ ええっ、もしかして私ですか？ ……そんなおかげさな。この程度の怪我でいちいち死んでいたら、この仕事はできません。まあ、昨夜はちよつとばかりしくじって危うく戻って来られなくなるところでしたけど、なんの、我ながらしぶといもんです。ですから、そのう……あのう、泣くのやめましようよ」

怒鳴られやしないかとびくびくしながらも、たどたどしい手つきで、アルデイの頭を撫でる。

アルデイは涙を拭<sup>ぬぐ</sup>って、脇に置いていた半仮面に手を伸ばした。泣き腫<sup>は</sup>らしたブサイクな顔を間近で見られるなんて、いやすぎる。

「……こんな大怪我をするなんて、いったいなにをしているんですの？」

訊くと、ラヴェルは困ったように口をへの字に曲げた。

「言わなきゃだめですか？ できればあまり聞かせたくない話なんですけどねえ……」

「聞きたいですの」

そうせがむと、ラヴェルは視線を外して途方に暮れたように溜め息を吐いた。迷っているが、ごまかそうと思っているわけではないらしい。唇に指をあて、どう切り出したも

のかと少し悩んだあと、素っ気ない口調で言った。

「ルシター・スニが眼を醒ましたんです。まあ正確には半醒半睡<sup>はんせいはんすい</sup>状態で……だから余計に厄介なんですけどね」

アルデイはぼかんとした。ラヴェルの言葉がきちんと理解できない。つい、思うがままの疑問が口を衝<sup>つ</sup>いて出てしまった。

「えつと……『ルシター・スニ』って英雄の『ルシター・スニ』のことですか？ でも、この昔に亡くなられましたの。その方がどうしていま関係ありますの？」

だがラヴェルはアルデイの問いにすぐには答えず、鼻をひくつかせ、「なにかいい匂いが……」と言つてまわりを見回す。そして、テーブルの上の銀の盆を見つけ、指差した。

「それ、私がいただいたちやつてもいいんですかねえ」

催促されるまま、アルデイは銀の盆をラヴェルの膝に載せた。そこには、二種類のチーズと炙<sup>あぶ</sup>った厚切りベーコンを挟んだサンドウィッチと、野菜を柔らかく煮込んだスープがあった。

「どうぞですの。でも冷めちゃってますの」

「ちよつと温めればいだけです」

ラヴェルが器<sup>うつわ</sup>に手を添えただけでスープは沸騰し、もわつと湯気が立った。

「では、いただきます。はー。久々のまともな食事ですよー」

さつそくばくつきはじめ。旺盛<sup>おうせい</sup>な食欲だ。これだけ食べられるならすぐに元気になるだろう、とアルデイは安堵した。

「あの」

さっきの話を詳しく聞こうと椅子からアルデイが身を乗り出すと、ラヴェルはスプーンを口に運ぶ手を休めずに言った。

『知る必要のないこと』ですよ」

傾けた器の向こうに、魔法使いの眼をした凄みのあるラヴェルが見えた。

その瞬間、アルデイは動けなくなった。論すようにも、警告するようにも見える強い眼光で、全身に緊張が奔る。

「もしくは『知るべきでないこと』です」

静かだがよく響く声でそう呟くと、ラヴェルは瞬く間にすべてを平らげ、食器を置いた。

「私はあなたのことが大好きで、あなたに嘘はつきたくないんです。でも、私の口から言うことでもないの……すみませんが、訊かないでもらうわけにはいきませんか？」

知る必要のないこと。

知るべきでないこと。

——それはつまり『国家機密』に他ならない。

アルデイは息を呑む。

なにが起こっているにしろ、国の大事だしたら一介の王妃付き侍女がとやかく言うことはできない。

アルデイは悔しさ半分、やりきれなさ半分の気持ちで頷いた。

「……わかりましたの。なにも訊きませんの」

「さすが私の大好きなあなたです。察しがよくて助かりますよー」

軽口を叩くラヴェルの眼は、もういつも通りの微笑を浮かべていた。

「でも！ 心配ですの。ずっとずっと、心配ですの……」

アルデイが泣きたい気持ちをぐっと堪えて訴えると、不意に半仮面を剥ぎ取られた。肩にラヴェルの手が触れる。

「……ありがとうございます。あなたに気にかけてもらえるなんて私は果報者です」

頬に親愛のキスをされる。ラヴェルはにこっと笑うとすぐに身体を離れた。

「もう行きます」

「ど、どこへですの？」

アルデイは仰天のあまり、思わず声が裏返った。そんな怪我を負っているのに動くなんて無謀だ。ラヴェルはベッドから下りると、魔法で一瞬にして身支度を整えた。

「師のところですよ。なにぶん、放っておくとすーぐ無茶をするんです。ひとを限界までこき使うくせに、本当に危険なことは自分でやりたがるものだから始末に負えないですよ。少しは頼ってくださいね。まったく、なんのために弟子の私がいるんだか」

ぶつぶつ言いながら、ラヴェルは星の杖を手練り寄せる。

アルデイはまだ塞がっていない傷の具合を心配しながらも、止めることはできなかった。

「気をつけて、くださいですの……」

「大丈夫。私は優秀な魔法使いですから、こんなことくらいでくたばりません。八十八角大結界の二つや三つ、どうってことないですとも、ええ。それに、あなたが私の身を案じてくださるなんて、俄然やる気になりました。まさしく愛の力つてやつですね」

ふざけているのか、本気なのか、わからない緊迫感のなさでへらりと笑うと、ラヴェルは杖を翳して姿を消した。

研究室ががらんとした空間になる。アルデイがシーツの皺に手を伸ばして掌を押しあてると、ラヴェルのぬくもりがまだそこに残っていた。

——知る必要のないこと。

——知るべきでないこと。

それはいったい、なんなのか。

言い知れない不安の波が胸にひたひたと押し寄せる。

そして不意に、建国祭の折に占い師がラヴェルに告げた言葉が脳裡に甦った。

——あなたは大きいなる災厄の相に迫られている。判断を誤れば命を落とすことになりかねない。

決して用心を怠らぬことだ。

無性に落ち着かなくなつて、そそくさと立ち上がった。こんなこと、とてもひとりで抱えきれない。誰かに相談したい。

でも誰に？ と考えたとき、即座に思い浮かんだのはひとりだけ。

アルデイは空になつた食器を載せた銀の盆を抱えて、急いで研究室をあとにした。

## 二

相良紅緒は以前から蔵書記録の編集を手伝う中で気になっていたのだが、とにかくこの書庫は使い勝手が悪すぎる。なにせ、単純に発刊順に並べられているだけなのでちつとも実用的でない。そこで少し前に司書長と相談し、ジークウイーンを通してアワード王に『大図書の間をもつと利用しやすくするための整理案』を提出したところ、あっさり受諾されたのだ。

まず、二十名の司書たちと検討したところ、用途別に棚分けすることで意見が一致した。書物を種別分けし、それから年代順、著者別に並べる。更に、色分けした種別カードを作成して、各自受け持った棚の書物にそのカードを挟み込む。それが済んでから、整理整頓作業に移ることになっていた。

だが書物は無尽蔵にあり、気の長い仕分け仕事になってしまった。

紅緒は自分が発案したということもあり、暇を見つけてはその作業に加わるようにしていた。

今朝は「来客の見送りがある」とジークウイーンに言われたので、紅緒は空いた時間を有効活用すべく「大図書の間」へ足を運んだ。

「お疲れ様です」

作業している司書たちにそう挨拶して、紅緒も早速取りかかる。長梯子を登り降りして、書物に合った種別カードを挟んでいった。

王家に関する書物には紫のカードを使用する。紅緒はそのカードを見て、ジークウィーンの瞳を思い出した。

夜の闇の中で熱を放ち、鋭利に輝いていた紫の眼。もともと恋愛方面にはうとく、免疫がない紅緒にとつて、あんなに真剣な告白をされたのは生まれてはじめてだ。

……いつたいつから好かれていたんだろうと、疑問に思う。特にジークウィーンに好かれるようなことをした覚えはなく、むしろ無礼三昧だったはず。それに、いまはともかく、はじめの頃は些細なことで喧嘩ばかりしていた。

だけど、一緒に過ごすうちに名前の呼び方が徐々に変化し、態度も柔らかくなってきて、最近では気の置けない仲になっていた。時折見せる優しい表情に戸惑うことはあつたけれど、まさか、あんなふうな特別な眼で見られていたとは思ひもしなかった。

「やっぱり私、どこか鈍いんだな……」

もう何度目の溜め息を吐く。もつと恋愛経験を積んでいけば、ひとの気持ちを酌んだ気遣いのできたのかもしれない。「他のひとではだめです」なんて冷たい言葉ではなくて、上手な断り方ができただろう。

でも、一度口にした言葉はもう取り消せない。後悔先に立たずだ。

せめて今朝会ったとき、なにか気の利いた言葉を言えればよかったのだけれど、それも出来なかった。ただいつも通り「おはようございます」と挨拶しただけ。

ほとほと、不器用な自分がいやになる。

「もつと優しくなりたくないなあ……」

書物の背表紙に指をかけたまま、紅緒は眼を瞑って深呼吸した。優しさにもひとそれぞれの形があつて、どれが正しいとは一概には言えないのだけれど——でも。

ひとの気持ちのわかる人間になりたい。上辺だけでなくて、思いやりのある人間に。

すべてのひとを大事にできるほど高潔でなくていい。だけどせめて、自分にとって大切なひとちは大切にできるようにになりたい。いまよりもつとずつと、強くそう思う。不用意な言葉や態度で傷つけたり、苦しめたり、悩ませたりしたくない。そのためには、もつと真摯に向き合つて、お互いをより理解し合わないこと。

「あ」

ふと、あることに気づく。「ばか……」と呻きながら、思わず持っていた書物で自分の額を叩いた。ジークウィーンにまだお礼を言っていない。好きなひとに気持ちを伝えることが、どんなに怖くて勇気が必要か知っているのに。自分だつてリゼに告白するときかなりの勇気と度胸を必要としたくせに。どうしてその気持ちを無下にできるだろうか。

そんなことをつらつらと考えていると、梯子の下で「ベニオー」と苛立ちを含んだ声が聞こえた。はつと我に返つて下に眼を向ける。そこには、紫のサラエンを着た仏頂面のジークウィーンが、腰に手をあてて立っていた。

「おまえ、私が何度呼べば気がつくのだー」

「えっ。あ、ご、ごめんなさい。いますぐ降りますから」

「待て、慌てるな。急ぐと危な——」

ジークウィーンが最後まで言わないうちに、紅緒は体勢を崩して咄嗟に柵を掴む。その弾みで、梯子がぐらりと傾いた。

「柵から手を放せ！」

その怒鳴り声に反射的に従い、手を離すとまっすぐ落ちた。すると、ジークウィーンの両腕どがつしりした胸板に受け止められる。

間一髪で頭上に倒れてきた梯子を避け、二人とも下敷きになるという最悪の事態からは免れた。

駆けつけた司書たちが慌てふためく中、紅緒はジークウィーンの腕に閉じ込められたまま怒られた。

「このたわけ！ 慌てるなど言っている傍から落ちおつて！」

「びっくりした……」

「びっくりしたのは私の方だ！」

「すみません」

「それで、怪我は？ 大丈夫か？」

「大丈夫、です……」

「本当に？ どこか痛むところは？」

「ないです」

あまりの剣幕に怯んでしまう。ジークウィーンもそれに気づいたのか、表情を改めると紅緒を抱きしめていた腕を解いて、ゆっくりと立たせた。

「助けてくれて、ありがとうございます……」

「いや、急に大声を出した私も悪い」

「違います。私が悪いんです。ちょうどジークのことを考えていたときに現れたから、驚いてしまつて。それで変に慌てちゃったんです」

「……私のことを考えていた、だど？」

意表を突かれた面持ちでジークウィーンが問う。

「それは……喜んでいいのか？」

「ち、違つ、あの、そうじゃなくて」

『『そうじゃなくて』？』

「とにかく違うんです！」

うまく口がまわらない。どうしてこう、肝心なときにちゃんと喋れないのだろう。

ふとまわりを見回すと、いつのまにか注目の的となっていた。司書たちは仕事の手を止め、興味津々の目つきでこちらを見ている。紅緒は急いでジークウィーンから離れた。くつつきすぎだ。もっと早くに気がつくべきだった。

一方、ジークウィーンは周囲の眼が気にならないようで、「よくわからんが」と首を捻ると扉に向かいながら言った。

「まあいい。おまえに見せたいものがある、ついて来い」

有無を言わずさっさと「大図書の間」を出ていったジークウィーンのを、紅緒は慌てて追

いかけた。作業が中途半端になるのはいやだが仕方ない。助けてもらった手前もあるし、「見せた  
いもの」も気になる。それに昨夜の一件もあり、ちゃんと話をしたかった。

ジークウイーンは廊下を進み、次は階段を上っていく。

「どこに行くんです？」

「沈黙の間だ」

紅緒は二ヶ月がかりで頭の中に叩き込んだ王宮内部の見取り図を思い出してみたものの、該当する部屋はない。ただ身分によって立ち入りが制限されている場所はある。

紅緒がジークウイーンについていくと、眼の前に現れたのは通称『紫の階段』、正式には『王族の道』  
と言う。

ここから先は階段に敷かれた布が紫のベルベットに替わっている。手摺にも細部まで意匠が凝ら  
されており、ところどころに王家の紋章が入っていた。

「ここから先は行けません」

「案ずるな。父上の許可は得ている。来い」

紅緒は気後れしながらも、ジークウイーンに続いた。途中で六名の憲兵の前を通り最上階に着く  
と、武装した二人の老憲兵が守りを固めていた。

「お待ちを。ただいま解除いたします」

銀の杖を手にした二人の老憲兵は同時に呪文を詠唱し、杖を交差させた。

「お待ちせしました。どうぞお通りください」

一見、なんにも変わったようには見えない。だが、なんとなく周囲には先程は感じられなかった  
すがすがしい空気が漂っていた。

「こちらだ」

窓がないため、日中なのに薄暗い。床に置かれた銀製の大燭台は廊下中央に一列で並び、奥へ進  
むにつれて蝋燭の数が少なくなっていた。通路の両側に部屋があるものの、どれも中は真っ暗で見  
えない。

奥から三番目の部屋に入ると、ぱっと魔法の光源が点く。

紅緒は淡い光の中に浮かび上がってきたものにどきりとした。正面にあつたのは絵画だった。等  
身大の人物を描いたもので、かなり大きい。金細工の重厚な額縁におさまった絵はとても古いもの  
らしく、全体的にくすんで見えた。

「リゼ」

紅緒は驚いた表情のまま、口元に手をあてて呟いた。

「そうだ」

ジークウイーンは紅緒の隣に立ち、壁にかかった絵をじっと見つめて首肯した。

肖像画には身体を斜めにして立ち、手を腰にあて少し怒っている様子のリゼと、白銀の髪に紫の  
瞳で無精ひげを生やした若い男が描かれていた。若い男の方は、椅子に足を組んで寛ぎ、肘掛けに  
肘をつけて含み笑いをしている。二人とも漆黒の長衣を纏っていた。

遠慮がない仲だとわかる豊かな表情が印象的で、とてもいい絵だと紅緒は思った。きつとこの絵を描いた画家は二人と懇意だったに違いない。

「初代宮廷画家ミーツェ・ニナスが描いたものだ。リゼと、もうひとりルシター・スニ。これは当時の二人を描いた、唯一現存する絵だ」

「どのくらい前の絵なんですか？」

「建国の祖クラヴ・サンバロウ王の時代だと言われている」

「ずいぶん昔なのによく残っていましたね」

「何十代か前の王が魔法修復したらしい。どうだ？ 感想は。リゼは変わってなからう」

「はい。いまのリゼと同じ……本当に、全然変わってないですね……」

紅緒は背をまっすぐに伸ばして指を組み、じつと絵を見つめたまま言った。

「……私、昨夜部屋に戻ったあと泣いたんです。不安で苦しくて、ひとりが寂しくなって、心の中でリゼを呼んだけれどやっぱ届かなくて……泣きながら寝ちゃいました。だけど、朝起きて気づいたんです。リゼがどんなにすごい魔法使いでも、私の心の中を覗けたり、気持ちが簡単に通じるわけではないんだなって。でも……」

いつも持ち歩いている身分証兼緊急連絡用の指輪を使えば、リゼを呼び出せたのかもしれない。けれどそういう使い方は違うと思ったので、やめておいた。

紅緒は壁に近づき、息遣いさえ感じられるような絵の中のリゼを見つめる。

「でも、人間だったら普通のことでしょう？ わかりあいたくて、心を届けたくて、だから皆、言

葉や態度で感情を伝えるんです。リゼが大魔法使いでも、私と同じ人間なら話し合うことで歩み寄ったり、解決できたりするんじゃないかなって。たとえ異なる時間軸で生きたとしても、お互い後悔しないような道が見つけられたらいいなって……」

紅緒は眼頭が熱くなるのを感じた。手で<sup>まぶた</sup>を擦る。強がっていると思われないよう、ぐつと歯を食いしばり、くるりとジークウィーンを振り返った。

「貴重な絵を見せていただいてありがとうございます。嬉しかったです」

「リゼと向き合うのだな」

「そのつもりです」

「では、私とも向き合ってくれないか」

「え？」

おもむろにジークウィーンは片足を引いて膝を曲げると、紅緒と眼の高さを同じにする。

「私もおまえのことが知りたい。おまえにも私のことを知ってほしい。だから蒼の夜までの間、共にいさせてくれ。私は知りたいのだ。自分が心を寄せる相手にどれだけ真剣になれるのか、ひとを欲する気持ちがどんなものなのか。心を許し、心をひらき、その果てに得るものはなんなのか。私はそんな私を見てみたい——」

一途で誠実な、それでいて己の感情に素直な眼だった。紅緒はその強いまなざしに射貫かれて、一瞬息が止まりそうになった。

「……その結果がどうであろうと、私は受け止める」

紅緒は深呼吸した。気持ちが悪く着くのを待って口を開く。ジークウィーンの本気に本気で応えたいと、紅緒は思った。

「わかりました。応じます」

「よいか」

紅緒は固い面持ちでこくりと頷いた。

「私は交際指南役です。心を許して、心をひらけと言ったのは私です。ジークが真剣なんです、私も真剣に向き合います」

本心からそう言うと、ジークウィーンは満足そうに、朗らかに笑った。

そして「沈黙の間」をあとにした。当たり障りのない会話の糸口を見つけられないまま、なんとなく無言で階段を下りていく。

「そういえば、おまえの愛猫はどうした」

「チビク口は朝から姿が見えなくて……たまにあるんです、こういうこと」

返事を聞くと「そうか」と納得したジークウィーンが続けて言った。

「真面目くさった顔でなにを考えている。まさか、臆したわけではあるまいな？」

堅い口調に含まれたからかうような響きに、紅緒はむっとした。

「違います。そうじゃなくて——私、ジークにお礼を言いたくて」

「礼？」

ちゃんと言おうと決めていたものの、改まると気恥ずかしい。紅緒は、やや顔を紅潮させながら

頭を下げた。

「……私を好きになってくださって、ありがとうございました。告白、嬉しかったです」

するとジークウィーンは手摺に手を置き、苦笑いを浮かべた。

「無理をするな。おまえ、あからさまに困っていたらどう」

「こ、困ってなんて……ちよっとだけです。……でも嬉しかったのも嘘じゃないですよ。好きなひとに自分の気持ちを告げることってすごく勇気があるじゃないですか。だから私のために勇気を持ってくれたこと、それが嬉しかったです」

数秒の沈黙ののち、ジークウィーンは息を呑み、掠れた声で呟いた。

「……おまえのそういうところが好きなのだ」

まともに見つめられて、紅緒は息が詰まった。返事ができないまま眼を瞬かせると、ジークウィーンは顔を伏せた。言い慣れない言葉を口にしたためか耳まで赤い。踵を返し、階段を早足で下りていく。逃げたいのはこちらの方だというのに。

そのあと、ジークウィーンと一緒に昼食をとりたいたいと言うので厨房へ向かった。途中の廊下で、リゼとばったり会う。

「リゼ！」

「ベニオ」

昨夜舞踏会場で別れて以来だ。半日会わなかったただけなのに、なんだかものすごく久しぶりのよ



うな気がした。

「君が部屋にいなかつたから探していたんだ……早く会いたくて」

抱き寄せられて、髪にキスされる。紅緒は強張っていた気持ち解れるのを感じた。ぎこちない動作でリゼの背に腕をまわしてそっと抱きしめる。深い安堵が広がっていく。

「私も会いたかつた……」

「本当？ じゃあ僕がいなくて寂しかつた？」

頭の上で響くリゼの声に「うん」と答えようとして、紅緒は異変に気がついた。血の臭いがする。

急いでリゼから身体を離してぎくりとした。ふと眼を吸い寄せられたリゼの足元には、小さな血溜まりができている。よく見ればリゼの顔色は蒼白だ。

紅緒の胸が急速に冷えていった。

「リゼ、怪我をしているの？」

「たいした怪我じゃないよ。血が止まらないだけで。それより僕、お腹が空い——」

まだ言い終えないうちにリゼはよろめいて昏倒した。前のめりに倒れてきたリゼを受け止めたのはジークウィーンだ。

「医者を！」

「呼んできます！」

紅緒は医務室へ駆け込んだ。だがあいにくと医者は出払っていて、残っていた看護助手に事情を

説明し、呼びに行つてもらつた。紅緒が通りかかつた侍女らに応援を頼むと、人手はあつという間

に集まり、リゼは担架に乗せられ部屋に運び込まれた。お湯や清潔なリネン類が用意される。紅緒はリゼの頭を動かさないよう注意を払いつつ、服を脱がせて驚いた。まるでガラス破片の集中砲火を浴びたような、夥しい数の裂傷。

「ひどい……」

ジークウィーンに鋭く訊かれる。

「止血は？」

紅緒ははつとして、小さく頷いた。茫然としている場合ではない。

「できます」

ジークウィーンは頷いた。

「私も手伝おう」

医者が来るまでの間、清潔な布で傷口を圧迫止血し、それからあとは医者の指示に従い消毒と縫合の手伝いをした。リゼは寝間着に着替えさせられても、一度も眼を醒まさないままベッドに横たわっている。さいわい出血の量は大事に至らなかつたが、短時間で熱がぐんぐんと上がり、氷嚢は取り換えてもすぐに温くなった。紅緒はつきつきりで看病にあたり、ジークウィーンもずっと手助けしてくれた。

紅緒はリゼの枕元の椅子に腰かけ、顔や首を拭いた。口元がひくついたときは口移しで水を飲ませた。寝顔は青白く、身体は熱いのにリゼを取り巻く空気は異様に冷めている気がした。

時折、上掛けを捲まくつて、指先や足の爪先が黒く変色していないかを確認する。白い。まだ大丈夫だ。だけどこの先悪化しないとも限らない。

刻々と時間が過ぎていった。気を利かせたジーチェが食事を届けてくれたが食欲はなかったため手をつけなかった。

紅緒の看病が功を奏したのか、リゼの熱はおおむねひいた。だが、呼吸は浅く、まだ顔色は芳かんばしくない。

じつと見守るだけの自分が歯がゆくて、でも他にどうしようもなくて紅緒の涙腺なみだだんがじわりと弛ゆるんだ。

「泣くな。泣いたところでもなにも変わらぬ。体力の無駄だ」

すかさず、少し離れて座っているジークウィーンに叱咤しつたされる。

紅緒は弱気になる自分を諫いさめると同時に、ジークウィーンに感謝した。ひとりきりだったら悪いことばかり考え続けたかもしれない。

「……前にも一度、こんなことがありました」

「そうなのか？」

「はい。リゼの身体は熱いのに空気は冷めていて……次第に手足が黒く変色していったんです。あとで訊いたら、魔力が急激に低下すると現れる症状で、回復すれば元通りになるから平気、なんてリゼは笑っていましたけど、私はとても危ないと思いました。昨夜だって、リゼの様子が変だと気づいたとき、無理にでも止めればよかった……っ」

大切なひとが、ある日突然いなくなる悲しみを知っている。

だからこそ相手を愛しく思う気持ちを表すのを惜しんではいけないのに。伝える努力おとどを怠おこつてはならないのに。

そうと知っていても実際に行動に移すのは、どうしてこう難しいのだろう。  
堪こたえ切れず、とうとう紅緒は泣いた。

たったいまジークウィーンに泣くなと言われたばかりなのに、涙が溢れて止まらない。泣きながら、自分がなぜ魔法を好ましく思わないのか、その理由を思い出していた。そうだ、リゼがあんなふう倒れたところを見て『魔法』という人外の力がただ便利なものではないと痛感したのだ。鳩尾みぞおちがすうっと冷たくなる恐怖感。頭の芯がいやに冴さえていて、久しく忘れていた感覚に身震みぞおちいした。

紅緒はぼつりと呟つぶやいた。

「魔法は怖いですが。でも……」

その『力』がなければここには来られなかった。リゼと出会うこともなく、皆と親しくなることもなかっただろう。魔法を否定はできない。でも受け入れることはまだ難しい。リゼは魔法を使いすぎて倒れるはめになっても、実験に失敗し魔法で怪我を負っても、反省しない。危ないことを平気でやってのける。そんなふうリゼが自分の命に無頓着なのが魔法使いゆえであることがわかるだけに、尚更さらそう思ってしまう。

「……泣かないで」

紅緒は弾かれたように顔を上げてリゼを見た。だがリゼは眼醒めたわけではなかった。眠ったまま、もごもご口を動かして、寝言を漏らしている。

「……ベニオ……」

優しい声が紅緒のささくれ立った心を包む。嬉しかった。紅緒は半泣きのまま寝入っているリゼの額に軽く唇を押しあてた。

「……早く眼を醒まして……」

そう紅緒が呟くと、いきなり、リゼの眼がぼつちり開いた。

これには紅緒もジークウイーンも仰天した。

そして第一声が――

「お腹が空いた」

反射的に紅緒は間近にあった額にゴンツと頭突きした。その呑気さが腹立たしい。

「ぎゃっ。痛いよっ！ いきなりなにすんの。ベニオ、ひどい！」

「ひどくない！ 痛くていいの！ ひとを散々心配させておきながら『お腹が空いた』なんてどれだけ気ままなの！ もう、もう、もう……っ。リゼのばか！ 知らないっ」

「ごめんなさい！ うわわわわ。な、なんで泣くの？ ぼ、僕、なにかした？ 理由はわからなけれど、僕が悪いなら謝るから泣かないで――」

舌こそ達者にまわるものの、リゼは怪我のせいでまだベッドから起き上がれないでいた。紅緒はリゼにしがみつき、安堵のあまり子供のよう泣きじゃくった。背後で静かに扉の閉まる音が聞こ

えたが、顔は上げなかった。

「……落ち着いた？ 大丈夫？」

「……ん。私より、リゼこそ大丈夫なの……？」

「僕は平気。まだ動けないけど、原因はわかっているから」

紅緒は、リゼが身動きできなくなるほどの状態に陥った経緯を、なんとしても聞きだすつもりだった。それが無茶苦茶な行為ならば、いま止めないとまた同じことが起こるかもしれない。

「原因ってなに？」

問い詰めると途端にリゼの顔が強張った。しどろもどろになり、眼が泳ぐ。

無言の圧力をかけるため紅緒が黙っていると、リゼは逡巡したままもごもごと言った。

「……知る必要のないこと、知るべきでないことってわかるかな……？ あのう、き、気を悪くしないでほしいんだけど、詳しくは言えないんだ。ごめん……」

眼をすまなそうに落とすリゼの様子に胸を衝かれた。困らせるつもりではなかったのだ。紅緒は慌てて首を振る。

「言えないことを教えて欲しいわけじゃないの。私はただリゼの身体が心配だけ」

「僕は大丈夫だよ」

にこりと清々しい微笑を浮かべるリゼにそれ以上なにも言えず、紅緒は席を立った。このときになつてはじめて、ジークウイーンの姿が見えないことに気がつく。では、さきほど扉が閉まった微かな音は彼が行ったときのものか。

「どこへ行くの？」

「お腹が空いたんでしよう？ ごはん作って来るから、少し待ってて」

「はい！ 僕、動けないから食べさせてくれると嬉しいです」

「はいはい」

「あ、待って」

リゼに呼ばれて、紅緒が肩越しに振り返る。傍に行くとキスをねだられた。

「……どうしてもいますぐ君の唇が欲しい」

リゼの静かな眼の中に情欲がちらついて、紅緒の内奥を刺激する。

「寂しかった。僕、変だ……たった半日君の顔を見なかっただけで、寂しくてたまらない。こんな気持ちになるなんて、ちょっとおかしい……」

「ううん、おかしくない……私も、寂しかった……」

紅緒は膝を折って、流れる髪を耳にかけながらリゼに顔を近づける。互いの呼吸が混ざる。リゼの匂いが鼻をかすめる。唇を合わせた途端にきつく吸われ、その刺激にくらっと眩暈を覚えた。

「……もう終わり？ まだ全然足りないのに……」

どちらのものともわからない唾液を口の端から零して拗ねるリゼは、壮絶に色っぽい。

一度のキスで気が遠くなつたなんて言えない。身体中が甘く痺れていて、顔は燃えるように熱い。そんな紅緒を、リゼは物欲しげな眼でじっと見ている。引き止められそうな気配を察して、紅緒は身体を引いた。

「ま、またあとでね」

「あとならいいんだ？ 僕としてはできればこの続きも——」

「怪我人はおとなしく寝てなさい！」

ぴしゃりと叱りつつ、紅緒は足元も危ういまま逃げ出した。

部屋を出ると、ジークウィーンが壁に凭れてそこにいた。気まずそうに一旦眼を逸らしたものの、ちゃんと紅緒の顔に視線を戻して「もう用はないとは思ったが、心配だったのだ」と告げる。

紅緒の頭に昇っていた血が急速に下った。足腰にぐつと力が戻る。

「まだ身体を動かすことはできませんけど、たぶん、もう大丈夫だと思えます」

「そうか」

安堵したジークウィーンの表情が明るくなる。「ならばよい」とそのまま去ろうとしたジークウィーンの腕を紅緒は咄嗟に掴んだ。

「ジーク」

「なんだ」

「『知る必要のないこと、知るべきでないこと』ってなんのことだかわかります？」

紅緒は、リゼと交わした交わした会話をジークウィーンに話して聞かせた。

聞き終えるとジークウィーンは簡潔に説明した。

「隠語だ。政務に携わる者のうちでは国家機密に関わることを指す。私も詳しいことは知らぬゆえ、調べてみる。なにかわかったら知らせよう」

さすが頭の回転が早い。紅緒が二言目を継ぐ前にジークウィーンはそう決断していた。「お願いします」

紅緒は頭を下げた。多忙なジークウィーンに負担をかけることをすまなく思ったことが顔に出たのかもしれない。長い指で、トンと額を小突かれる。

「こんなことたいした負担ではない。リゼのことなら私にとつても他人事ではないのだ。それに……」  
「それに？」

「おまえに頼られるのは悪い気がしない」

悪戯っぽい小さな微笑の中に誇らしげな光が瞬いて、紅緒の眼を奪った。

この方は本当にどんどんすてきになる——

「厨房まで送る」

そう申し出たジークウィーンに厨房まで送り届けてもらい、礼を言ってそこで別れた。

紅緒は、リゼの好物の鳥おかゆとジャーマンポテトと温野菜を用意して運んだ。待ちわびていたリゼの枕元に腰かけ、ゆっくりと給仕する。

「うわーっ、おいしいね！」

「よかった。たくさんあるからよく噛んで食べてください」

「はいっ。くーっ。これだよ、これ。僕は君とこーゆーいちゃいちゃべたべたがしたかったんだ。

しばらくご無沙汰だったからさ、あー僕って幸せ者だあ……ほわーん」

「ほわーんはいいから、あーんして。冷めちゃうでしょ」

紅緒はくすくす笑いながら、リゼがゆるみっぱなしの顔で食事をきれいに平らげるのを手伝った。

「はい、じゃあ少し寝て」

「傍にいてくれる？」

「はいはい」

紅緒はリゼの顎下まで上掛けを引っ張った。いつもの癖で上目遣いのリゼの頭をそつと撫でる。

するとリゼは気持ちよさそうに眼を瞑った。そんなリゼは子供のようで少しかわいい。

「あのう、手を握って欲しいんだけど……だ、だめ？ 甘えすぎ……？」

「……いよいよ」

リゼの喜ぶ顔を見ると、つい紅緒はなんでも許してしまいたくなる。手を繋いであげると安心したのか、間もなくリゼの寝息が聞こえてきた。浅い呼吸音に誘われるように紅緒もうとうとしはじめ、いつのまにかリゼの枕元に伏せつて眠ってしまった。

紅緒がうたた寝から眼を醒ますともう日没間際で、茜色の残照が部屋を照らしていた。

紅緒はまだ寝ているリゼを起こさないように、そつとバルコニーに出た。

「きれい……」

王宮と市街が西日を受けて光輝に染まっている。平らな線状の雲が山吹色と紅紫が交ざった色合いに照らされる様は絶景だ。

「……君の方がきれいだ」

囁きが耳朶を打ち、背後から伸びた腕に抱きしめられて紅緒は驚いた。

「リゼ。もう起きて大丈夫なの？」

「ん。君のごはんのおかげでだいぶ楽になった。ありがとう」

リゼは髪をほどこいて、寝間着のままだった。その状態で密着すると薄い布地の下にあるリゼの逞しい身体を感じてしまい、紅緒は焦った。おまけにリゼの手が胸のすぐ下にあり、なんだか落ち着かない。

だが、リゼはびったりくっついて離れようとしなない。

「……好きだよ、ベニオ」

「……うん、私も」

すると、リゼは紅緒の身体を放してくると半回転させた。太陽に照らされる中、リゼの手が紅緒の左手をすくい取り、高く持ち上げたその指先に唇を押しあてる。一度閉じたリゼの瞼が開けられて、紅緒は射竦められた。

「僕……本気だよ。君が考えるよりずっと真剣なんだ。四年前から」

リゼが真情のこもった声で言って、甘くて切なげな微笑を浮かべる。

「ね、ベニオ。僕があげた緊急連絡用の指輪、持ってる？」

「あるけど……」

「貸して」

紅緒が内ポケットを探って取り出すと、リゼはそれを紅緒の左手中指に嵌めた。

「君が自分で外さない限り取れないように魔法をかけた。しばらくこのままつけていて欲しいんだ」  
「突然、どうしたの？」

リゼは言葉が濁して落ち着きなく身体を動かす。

「えーと。僕、忙しくて研究室も留守にすることが多くなる。夜もちゃんと帰れないかもしれない。だから、僕に用があるときはその指輪に呼びかけて。すぐに行くから。あ、ごはんも当分いらなかな。その代わり、帰ってきたらたくさん作ってね！」

「食事ぐらいちゃんにとらないとだめよ」

「うん、大丈夫、大丈夫」

リゼがへらりと笑う。だが紅緒はごまかされなかった。

なにをするつもりなのか、わからない。だけど。

飄々とのんきな笑顔で真意を隠し、裏でひとり、動くつもりだ。

それがなんであれ、知らなくていいことなのかもしれない。でも、もしもそれがリゼの身に危険が及ぶようなことであれば、見過ごせるわけがない――

リゼが眼を伏せて頬を指で掻く。遠慮がちなお願いをするときのしぐさだ。

「ちよつと言いくいんだけど」

「わかっています。お腹が空いたって言うんでしょ？」

「あたり！」

紅緒がそう言いあてると、心底感心したようにリゼが手を叩く。紅緒は破顔しながらリゼの腕を

取った。

力になりたい。頼ってほしい。

なのに、リゼは肝心なことは教えてくれない——

紅緒はリゼのためになにかしたいと思った。自分にもなにかできることがあるはずだ。と、心を決めて、紅緒は訊いた。

「なにか食べたいもの、ある？」

三

「……まだお留守ですの」

深夜、カトレーの部屋を訪ねたアルデイだったが、応答がなかったため部屋の前で待つことにした。こんな時間に廊下で男性を待つなど褒められたことではないが、どうしても昼間会えなかったのだから仕方ない。

知ってはいたが、カトレーは多忙だった。日中捕まえることは早々に諦め、アルデイも仕事に戻った。王妃カルバロッサに遅参の理由を述べると、責められることはなかったものの、ラヴェルが戻ったら、「その後の経緯」を話すことを約束させられてしまった。

アルデイは主のいない静かな部屋の扉に寄りかかった。研究室に夕食を届けに行ったが、ラヴェ

ルは不在だった。あれから戻った様子はない。一応食事は置いてきたものの、あんな状態でいまごろどうしているのか心配だった。

「……こんな時間にいったい何の用かな？」

不意に声をかけられて、アルデイはびよこんと跳ねた。

振り返るとカトレーが眼元を険しくして立っていた。

「ご相談がありますの」

「今日はもう遅い。明日にしなさい」

アルデイを脇に退かせて中に入り、カトレーはそのまま部屋の扉を閉じようとした。

「待ってくださいですの！ どうしても気懸りなんですの。カトレー様しか頼れませんの。お疲れのところ申し訳ないですけど、アルの話聞いていただきたいんですの」

必死に食い下がると、カトレーは扉に手をかけたまま溜め息を吐いて言った。

「……君がそうまで言うからには、よほどのことなのだろうね」

「はいですの」

「……わかった。入りなさい」

アルデイはおずおずと中に入った。カトレーが後ろ手にパタンと扉を閉めると、その音がよく響いてアルデイは少しだけ怖気づいた。

「どこでも好きなどころへかけて。なにか飲む？」

アルデイは、長椅子の端に膝をくっつけてちょこんと座り、差し出されたグラスを受け取った。

趣味のいい透かし細工の一品だ。それに口をつけながらアルディはこっそり部屋の内装を眺める。カトレーの部屋に入るのははじめてだ。

銅製の大燭台と小さな蝋燭立てのみ灯りをつけている。ぼんやりとした光に浮かぶのは深い森を想起させる濃緑の壁紙と同色の生地の家具一式。どれも実用一点張りの造りで、他の家具にも華美な装飾はほとんど見当たらない。壁にかけられた絵画にも著名な作家の作品はひとつもなく、素朴な丘陵風景を描いた小さな細密画が並べられているだけだ。

サラエンの襟元を少し弛めながら、差し向かいの椅子にカトレーがどさっと腰かけた。疲労の色が濃い。その様子を見て、アルディは心底申し訳なく思った。

「話とは？」

「ラヴェル様のことですの」

ぴくりとカトレーの眉が動く。表情に冷たい陰が射したが、カトレーは一瞬で取り繕う。「それで？」と先を促されて、アルディはラヴェルと交わした会話を仔細漏らさず話した。カトレーは相槌を打つこともせず、すべて聞き終えてもしばらく黙っていた。

『ルシター・スニの覚醒』『知る必要のないこと、知るべきでないこと』……確かになにか問題が起こっているようだね」

理解の早いカトレーは、要点のみ声に出す。

「他にはなにか言ってなかった？」

アルディは耳を触って考えた。そういえば、と思い至る。

「……消える間際、八十八角大結界の二つや三つがどうのって言っていましたの」

「なんだって」

カトレーは唸るように声を荒らげて椅子から腰を浮かせた。その剣幕にアルディがたじろいでも、カトレーは驚いた表情を崩さない。

「まさか、そんなことができるものか。いや、大魔法使い殿ならばやつのけられるものなのか……しかし、二つ三つだと？ ばかな、命が幾つあっても足りやしない……！」

「そ、そんなにすごい魔法ですか？」

「大魔法だ。とてつもない魔力を必要とする。魔法研究所の金の杖保持者が束になったところでできるものじゃない。それを二重三重も張り巡らせるなんて、とても正気の沙汰とは思えないね」

じつとしていられなくなったのか、カトレーは部屋の中を往復しはじめた。

「そんな大魔法を使ったのなら倒れるのも道理……むしろあの程度で済んでさいわいと言うべきだろう。だがそれほど強大な結界を必要とするとは……俄かに信じられないが、まさか本当に『英雄ルシター・スニ』が生きているのか……？」

アルディは悪い予感に胸が締めつけられた。真剣に引き留めなかったことをいまになって後悔する。血溜まりに倒れていたラヴェル。二度目がないとどうして言えよう。

いつのまにか全身が震えていた。

「しっかりしなさい」

アルディの様子がおかしいことに気づいたカトレーは、肩を揺さぶってそのまま抱きしめる。耳



にカトレーの規則的な鼓動が響き、身体にまわされた腕の熱さが頼もしくて心地よい。

「この件は私が調べる。なにかわかればすぐに教えるよ。ラヴェル殿のことは——」

アルディは締めつくようにカトレーを見た。カトレーは微笑みながら力強く頷く。

「……心配する必要はないと思うがね。あのべらぼうに口数が多くて凶々しい男がそう簡単に野垂れ死ぬとは思えない。次に現れるときはびんびんしているに違いないよ」

「でも」

「大丈夫、私を信じなさい」

カトレーが眼を細め、アルディの額にかかった髪を掻き上げた。唇をアルディの額に押しあて、次に瞼と頬に励ましのキスをする。

すると、アルディは激しい動悸が徐々におさまってくるのを感じた。自分の背を擦ってくれる彼の手が優しい。アルディが落ち着きを取り戻すと、カトレーの腕がゆっくりと解かれた。

「さあもう夜も遅い。部屋に戻りたまえ。……それともここで私と一夜を明かす？」

瞳が甘く茶目つ気たつぷりに輝く。軽薄な言い方だったが、その声音は気遣いにみちていた。実際そんなつもりはないことを示すようにアルディを立ち上がらせると、扉を開ける。

「ありがとうございます」

「いやなに。だがひとつ訊きたいね」

カトレーの青い瞳が真剣さを見せたので、アルディは軽く身構えた。

「……どうして私を頼ってくれたのかな？ イザック殿でもベニオ殿でもカルバロッサ王妃陛下で



もなく」

きよとんとした顔でアルディはぼんやり答えた。

「どうしてって……だってカトレー様が真っ先に頭に浮かびましたの。他の方を頼ろうなんて全然思いつきもしませんでしたの」

「……ああ、そう」

「はいですの」

「真っ先に、ね……」

アルディはカトレーの口元が綻ぶのを見た。その表情はやや照れているようにも見えて、なぜか胸がどきどきした。もしかしたら、自分はとても恥ずかしいことを口にしてしまったのかもしれない。アルディは俯いたままカトレーに肩を抱かれて、部屋まで送ってもらった。だが、別れがたい気持ちを感じて、アルディはぐずぐずと扉の前に突っ立っていた。なにか気の利いたことを言いたいけれどもうまく言葉が出てこない。

それはカトレーも同じようで、二人はしばらく無言のまま見つめあっていた。ややあつてカトレーは息を吸ってから、爽やかな微笑を浮かべる。

「……また、明日」

「お、おやすみなさいませですの」

やっとのことでアルディがそう言うと、カトレーは片手を上げて踵を返す。不意に強い衝動に駆られたアルディは、その背に向かって叫んだ。

「今日は本当にありがとうございますですの！ あの、とっても助かりましたの。頼もしかったですの。カ、カトレー様がいてくださってすごく心強かったですの……！」

すると、突然カトレーはつかつかと傍まで戻ってきた。青い瞳に一条の激しい光が浮かぶ。首筋に手をあてられ、不審に思う間もなく一気に唇を奪われた。

「……私を煽る君が悪い」

茫然とするアルディを部屋の中に押しやりながら、カトレーが劣情を抑えた声で呟いた。

「だがそれに負けた私はもつと愚かだな」

#### 四

湯上りでまだ髪が濡れたまま、ジークウィーンは長椅子に寝転がっていた。

今日は就寝前に紅緒の部屋へ行かなかった。紅緒には前もってその旨を知らせたので、リゼと睦まじく過ごせただろうかと、ぼんやり思い巡らせる。

恋敵に塩を送るなんて愚かだっただろうか。

だが、ジークウィーンは紅緒とリゼが一緒にいるところを見るのは嫌いじゃなかった。なんというか、普段は鉄面皮のリゼが相好を崩して恰好悪い男でいると、微笑ましく思える。リゼは紅緒といるときだけよく笑い、紅緒もリゼの前では取り繕わない。些細なことで口喧嘩する姿には、嫉妬